

## 天下普請の城

滋賀県立大学教授 中井 均

彦根城は国宝5天守のひとつとして、また、徳川幕府の譜代筆頭井伊家の居城としてよく知られた城です。このため、観光客の大半は天守に登って帰るだけで、彦根城が徳川幕府による天下普請の城であることはほとんど知られていません。

慶長5(1600)年の関ヶ原合戦は天下分け目の戦いとして有名ですが、合戦後に平和が訪れたわけでは決してありませんでした。むしろ関ヶ原合戦直後は戦国時代最大の軍事的緊張を生みます。それは徳川対豊臣の最後の戦いへのカウントダウンが始まったからです。合戦直後から徳川家康は豊臣秀頼のいる大坂城を包囲するかのよう築城を命じます。東海道沿いに膳所城を、山陰道沿いに亀山(亀岡)城と篠山城を、北国街道沿いに長浜城を、そして中山道沿いに彦根城です。これらの築城は城主である大名が行ったのではなく、徳川家康によって全国の大名たちに手伝いが命じられます。こうした大名たちを助役と呼んでいます。彦根築城にあたって『井伊年譜』は、公儀から3人の奉行が派遣されるとともに、全国7カ国12大名に助役が命じられたと記しています。

ところで彦根城の天守は大津城の天守を移築したものであることはよく知られていますが、天秤櫓も長浜城の大手を移築したものであると伝えられています。また、太鼓門も移築された建物であることが判明しています。つまり彦根城の建物の多くが他の城から移されてきたものようです。これは決して廃城の部材を再利用するというエコ的なものではなく、軍事的緊張の高まるなか、短時間で築城を完成させるための再利用だったのです。

石垣の石材についても『井伊年譜』には、佐和山城や長浜城、安土城の石材を用いたと記していますが、これも湖岸で廃城となった城跡の石材を船に積んで彦根に運び、山から切り出す時間と手間を省いたわけです。



こうした慶長の築城では城主の住む御殿も山上の本丸に構えられていました。もちろん戦争を想定したためです。大坂夏の陣が終わると住み難い山上から山麓に御殿は移動します。それが現在博物館として復元されている表御殿です。

同様に大手の向きも移動します。慶長の築城は対大坂戦を想定して築かれたため、大坂方面に大手が構えられていました。現在も内堀の南側に大手門跡が残されています。そして中堀には京橋口が構えられています。この門は京都方面を向いているので京橋と呼ばれているのですが、京都の延長線上にある大坂方面に向いていた城門だったのです。ところが大坂夏の陣が終わり、戦争がなくなると、大手の役割も変化します。江戸幕府は全国の諸大名に参勤交代を命じます。彦根藩主は表御殿より佐和口を通して江戸と彦根を行き来することとなり、城の正面は大手から佐和口へとほぼ180度入れ替わることとなります。

城下町の構造も南側に防御正面を構えていました。つまり大坂側の外堀のさらに外側に足軽町を配置して、敵の攻撃を見据えていたことがわかります。そして城下の最前線として善利川(芹川)を人工的に付け替えて防御線としていました。

中井 均(なかい ひとし)

1955年大阪府生まれ。龍谷大学文学部史学科卒業。(財)滋賀県文化財保護協会、米原市教育委員会、長浜城歴史博物館館長を経て現職。びわこ学院大学、金沢大学非常勤講師。NPO法人城郭遺産による街づくり協議会理事長。専門は日本考古学。特に中・近世城郭の研究。